

企画展 花木にみる 日本美の心



曲子光男《開春》
—「花木にみる 日本美の心」より—

■ 新春優品選【前田育徳会尊經閣文庫分館・古美術】

■ 書をあじわう【近現代書】

■ 優品選【近現代絵画・彫刻】

■ 新春優品選【近現代工芸】

- 展覧会回顧 企画展 いしかわの工芸 歴史の厚み ～加州刀と加賀の工芸～
- ミュージウムレポート 学校出前講座
- 1月の行事予定
- アラカルト ただいま展示中

新年のご挨拶

館長 青柳 正規

今年の世界にとって、また日本にとって特別の一年になるのではないのでしょうか。昨年の正月、新型コロナウイルスが中国で発生している報に接してはいましたが、まだ対岸の出来事ではありませんでした。ですから、三月下旬にオリンピック開催が延期になるまで、事態がそれほど深刻化しているとは実感できないほどでした。ところが驚くほどの速さで世界中に広がり、それまであたりまえに思っていた日常の条件や環境がコロナ禍の中で大きく変わったため、戸惑いながらも新しい日常を確立するために人々が知恵を絞っています。

石川県立美術館としても伝統工芸を中心とする美術の普及・振興・発信を行うだけでなく、いかに新しい日常を構築するかを工夫していききたいと考えています。これまでと同じ様にできるかぎり多くの

方々に来館して直接美術品を鑑賞して頂くと同時に、自宅、学校、職場など美術館以外の場所でも展示品を身近に感じていただける方策を作り出していく試みに挑戦しなければならぬと感じています。

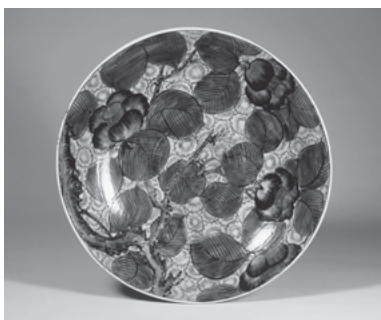
本年は昨年延期の決定をしたオリンピックとの関係からやはり一年延期となった「北陸国際工芸サミット」を開催します。石川県にかぎらず富山県と福井県も視野に入れた大規模な工芸展では工芸王国である北陸の真の力を発信できると信じています。素材と技術に精通した工芸作家の真髓に触れることによって、匠のわざと精神を感じとっていただければと念じています。館員一同、今年も美術に親しんでいただけるよう努めて参りますのでどうかよろしくお願い申し上げます。

学芸員の眼

わが国では、四季がはっきりしており、季節ごとに移ろいゆく四季の変化によって、自然の美しさは他の地域とは比較にならないほどと評価されています。同じ温帯地域にありながら、中国や朝鮮半島では日本ほど微妙な変化はみられません。島国である日本では南方からの暖流、北方からの寒流が重なり合い、熱帯と寒帯それぞれの要素が入り交じって、自然の様相をさらに複雑なものとしています。

このような四季の移り変わりや気象の変化が、日本の自然の特色であり、こうした風土で生活してきた人たちは、いつの間にか変化に富む自然に順応し、風土性に富む生活文化を営むようになってきました。そして常に自然と人間生活との結びつきを大切にしてきました。

日本人は自然の感情を「花鳥風月」「雪月花」というようなことばで呼び、自然美を賛嘆してきました。こうした日本の美の心を、展示される作品から感じとっていただければと思います。



《青手椿図平鉢》古九谷

第7・8・9展示室 企画展 花木にみる 日本美の心

主催／石川県立美術館 後援／北國新聞社

1月4日(月)～2月7日(日) 会期中無休

新春の企画展として、自然の中でもとりわけ花や木を主題とした美術作品を通して、受け継がれてきた日本人の豊かな感性を感じとっていただく展覧会です。

わが国は、四方を海に囲まれた狭い島国です。しかしここでは、多様な自然環境が形成され、春・夏・秋・冬という四季の変化がはっきりとしています。日本人はこうした自然に適応し、自然と共生する文化を築き上げてきました。

自然とともに暮らしてきた日本人が、自然を主題として作り上げてきた美術工芸品は、まさに自然が主役であり、自然の姿が日本人の心を代弁しています。自然の美や四季の移ろいを的確に感じ取ることができるのは、樹木や草花が示す自然の情景です。そして、日本人特有の微妙な感受性の世界は、こうした自然美によって育まれたものであり、日本美術の根底には、自然に対する優しい情感が潜んでいます。

花木草花は、その題材の明快さとともに、日本人の情緒的・装飾的感性を表現するのに最もふさわしいものであったことから数多くの美術作品がつくられました。

本展覧会では、山水花鳥や花木草花を主題とする作品とともに、季節の情趣をよくあらわす事物を取り上げた作品、季節感を感じさせる人々のくらしを取り上げた作品を展示し、日本美術の特色の一つといえる自然に対する優しい情感を感じとっていただくものです。

◆観覧料

一般…八〇〇円(六〇〇円)

大学生…六〇〇円(五〇〇円) 高校生以下無料

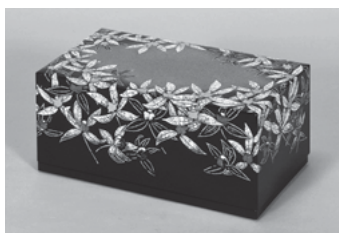
※()内は二十名以上の団体料金。当館友の会会員と六十五歳以上の方は団体料金に割引。



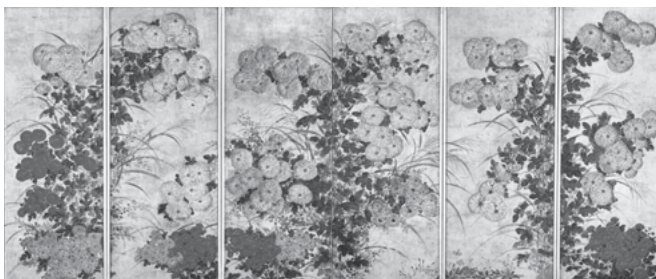
鈴木華邨《竹梅図》



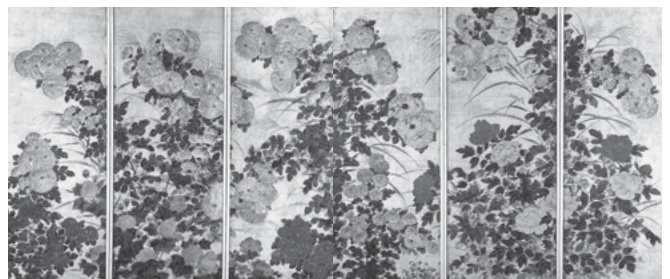
中川一政《向日葵》



二代砺波宗斎《蘭花文時絵箱》



泉文《盛上菊図》真宗大谷金沢別院蔵



新春優品選

1月4日(月)～2月7日(日) 会期中無休

前田育徳会尊經閣文庫分館に同じく、第2展示室においても「新春優品選」として、本館が所蔵する茶道具を展示します。はじめに、毎年この時期に展示することの多い、重要文化財の野々村仁清《色絵梅花図平水指》についてご紹介しましょう(写真は八ページ)。

仁清は、京焼という京都で焼かれる陶磁器の大成者といわれます。その特徴は華やかさと品格を備えた作風です。昨年MOA美術館にて開催された展覧会『仁清 金と銀』(※当館からの出品はなし)では、代表的な茶壺だけでなく、茶碗や香合、香炉なども紹介されました。仁清の豊かな造形力に改めて注目が集まりましたが、当館にて常時展示中の国宝《色絵雉香炉》や重要文化財《色絵雌雄香炉》、そしてこの平水

指についても、他に類のない仁清の代表作です。平水指の周囲を、どっしりとした幹の枝から咲く梅花が包みます。デザイン化された梅花は、赤だけでなく金と銀も用いて表現されており、より華やかな印象を与えます。華やかさのみならず迫力もあり、水指の径は二十センチメートル以上です。今回は、同じく仁清の《色絵花笠香合》も展示します。こちらは手のひらに乗るような小さな作品ですが、香合の形を花笠に見立てた美しい作品です。

本特集では、ほかに数年前に新取蔵となった石川県指定文化財《粉引茶碗 銘楚白》、同じく県指定文化財《青井戸茶碗 銘宝樹庵》など、金沢に伝わった茶道具を紹介いたします。本館のコレクションの母体である山川美術財団旧蔵の茶碗や香合も是非ご覧ください。



《色絵花笠香合》野々村仁清作

新春優品選

1月4日(月)～2月7日(日) 会期中無休

前田育徳会尊經閣文庫分館では、「新春優品選」として、茶道具を中心に展示します。前田家の茶道は、藩祖利家が利休や織田有楽に学んだことに始まり、三代利常の時、京都から仙叟宗室を招いて以降、藩内に広く普及することになります。歴代藩主は、名物をはじめとする茶道具を数多く所持し、茶の湯に親しまいました。こうして伝えられた茶道具をはじめ、今回展示する作品二十九点のなかから四点紹介します。

《玳皮蓋天目茶碗(梅花天目)》

茶碗の外側が、まるでべっこうのような発色であることから、玳皮蓋と呼ばれます。中国の宋代の吉州窯で焼かれました。内側の斑文が梅花のように見えることから、「梅花天目」と呼ばれます。

《名物 尼ヶ崎台》

唐物の天目台で、名物と称されています。摂津国の

尼崎に漂着した唐船から手に入れたとされることから、この名がつけられました。高台の内部に百足のような朱の印があります。

《古瀬戸茶入》銘孫六

瀬戸釉を上部にたつぷりとかけた遠州好みの茶入です。挽家(仕覆)に包まれた茶入を納める木の器)には、遠州による「孫六」の文字が入ります。

《鷹狩図絵巻》六代梅田九栄

鷹狩は、江戸時代の権力者のみに許されていました。春夏秋冬、それぞれの季節における鷹狩の様子が本絵巻には描かれています。梅田家は代々九栄を名乗り、前田家の御用をつとめた狩野派絵師の家柄です。久隅守景の《鷹狩図屏風》との類似がみられることから、鷹狩は狩野派にとって重要な画題であったことがわかります。春の景を紹介いたします。

《玳皮蓋天目茶碗(梅花天目)》

優品選

1月4日(月)～2月7日(日) 会期中無休

昨年は全世界がコロナ禍に見舞われた年でした。本年は人類の底力をみせたいところです。令和三年最初の優品選のご紹介です。

日本画は初夢にちなみ、近代日本画家による富士山を複数点展示します。見どころは、横山大観と竹内栖鳳の小品による東西対決です。さてどちらに軍配を上げますか。ところで縁起のよい初夢「富士二鷹三茄子」は、後に「四扇五煙草六座頭」と続くそうです。

油彩画からは岡田三郎助《樹間の家》を紹介しましょう。岡田は明治二年佐賀に生まれ、黒田清輝の知遇を得て外光派を学びました。渡仏してラファエル・コランに師事し、官展を中心に活躍。東京美術学校や石川県工業学校などで多くの後進を育てました。《樹間の家》からは、温雅な作風を好み日本の風情の表現を大

切にした岡田の作画姿勢が伺えます。

彫刻からは、野島耕之介《途》を紹介しましょう。なにかにもたれて立つ男性は、一息ついて休憩中でしょうか。野島は、男性像によって写実を追究し続ける作家です。昭和五十六年、五十七年に、日展で特選を連続受賞していますが、本作はその二回目のもので、充実期の作品をお楽しみください。

書は文字の造形を筆と墨によって、絵画とも通じ合う感覚で多彩な美観を育んできた世界です。今回は書における絵画的な表現として、北陸で前衛書の先頭に立つ表立雲の作品をご紹介します。また、筆さばきによって生じた色調やリズム感などを感じる素描・版画作品も併せて展示します。



野島耕之介《途》

書をあじわう

1月4日(月)～2月7日(日) 会期中無休

書は作者が紙に向かって一本の筆を持った時、その動きの跡として紙面に残った墨で表された「かたち」と余白の「空間」が生み出されたものです。その時、筆の動きで紙の上をたどり、紙面に残った「かたち」は実画として残っていますが、実画で残る前後の空中をたどる筆の動きは、虚画であり目には見えません。実は書作品の一字、あるいは一行、作品全体は、この実画と虚画で成り立っているともいえます。

書を鑑賞する時、紙に残った「かたち」の実画と、見えない虚画も合わせて捉えることは、今までと違った書の味わいを知ることにつながります。それを知る鑑賞方法を紹介しましょう。まず、少し距離を取って作品全体が見えるくらいの場所に立ってみます。そこから一文字の起筆から終筆へ、あるいは、一文字ご

とに、行から行へと「かたち」の実画を指でなぞってみましょう。このように筆の動きの軌跡を丁寧になぞってみると、作者がその作品を書いた時の筆の動きである実画と共に、見えない虚画も知ることができるようになります。また、なぞる動きの中で筆の先が紙に対してどのくらい深く埋まるか、紙の上をどのくらいの速度やリズムで進むか、そして筆の先がどんな傾きで紙に對するかと共に、書線の濃淡、潤濁などの違いも体現できることでしよう。

書線を書かれた順に追っていく鑑賞方法では、作品が生み出された時の作者の息づかいまでも感じることがができます。そして鑑賞者が時と場所を超えて作品とつながることができ、そのことは書を味わう醍醐味となることでしよう。



江川碧潭《大無心》

いしかわの工芸 歴史の厚み ～加州刀と加賀の工芸～

本展は、今日の「工芸王国石川」のルーツを探るとの趣旨から、第一章を「加州刀」としました。前田家による統治に先立ち、加賀には在地武士団等のために刀を鍛える勝れた刀匠がおり、刀剣に付随した金工、木工、漆芸、染織などの工人が活動していました。こうした匠の集団の連携が「工芸王国石川」のルーツであり、加賀藩主前田家が武器の製作・補修を行う工人を核に工芸を振興した背景には、江戸幕府との緊張関係の中で、この伝統に立脚していつでも軍事に転用できる様々な技術を維持する目的があったことを再認識しました。

続く第二章は「古九谷と加賀蒔絵」とし、幕府への対抗意識から京都や江戸にはない、独自の美意識を追求した成果である古九谷と加賀蒔絵をとおして、工芸史に銘記されるような独自の様式を創出した藩主と作家の高い美意識と、高度な技術をもってその美意識に添う作品を生み出した加賀藩の制作体制を再認識しました。



新春優品選

1月4日(月)～2月7日(日) 会期中無休

新春優品選として新年を祝うにふさわしい、吉祥文様で飾られた工芸作品を紹介します。吉祥文様とは縁起がいいとされる動植物や器物などを絵画・工芸品に描いた図柄のことで、現在でも東アジアを中心に広く愛されているモチーフです。

例えば、厳寒に耐えて緑を保つ松・竹、他の植物に先駆けて花開く梅は「歳寒三友」として知られています。また、長寿の象徴として鶴と亀、瑞祥を告げる伝説上の動物として、鳳凰や龍なども有名で、中国・前漢時代に著された『淮南子』や中国最古の詩集『詩経』などにも登場します。

さて、今回は九谷庄三《色絵金彩八仙人花鳥図大花瓶》を展示します。九谷庄三は江戸時代後半から明治初期に活躍した陶工で、洋絵具を取り入れた彩色金

襷技法と赤絵を用いた華やかな「庄三風」を確立させ、輸出九谷の主流となる製品をつくりました。本作には二つの窓それぞれに八仙と花鳥が緻密で色彩豊かに描かれています。八仙は日本でいう七福神のよなもので、華人社会ではとても人気のモチーフです。一方の鳥は色鮮やかで尾が長いなどの特徴から、鳳凰だと考えられます。鳳凰は天界を統べる女仙・西王母の乗り物ともいわれているので、西王母の存在を暗示していると想像できます。このことから本作は明時代・呉元泰の小説『東遊記』にみえる、西王母の長寿を祝して八仙が集まった場面であると考えられ、まことにおめでたい画題であるといえます。

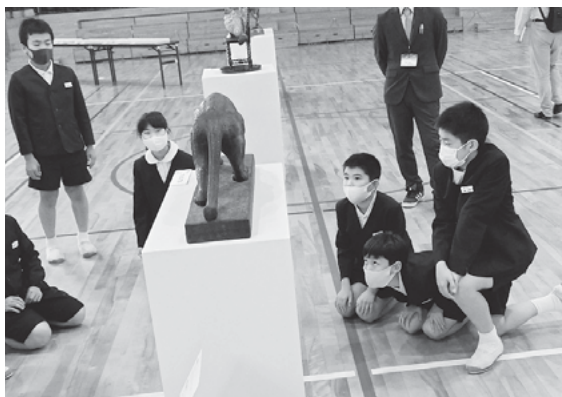


九谷庄三《色絵金彩八仙人花鳥図大花瓶》

ミュージアムレポート

学校出前講座

学校出前講座は、県内の学校で所蔵作品を展示し本物の作品の魅力に触れてもらう取り組みで、平成十七年度よりスタートし、本年で十六年目となります。例年、美術館へ足を運ぶ機会の少ない地域の学校を中心に十校程度行っていますが、今年度は新型コロナウイルス感染症の影響もあって、四校の開催となりました。十月から十一月にかけて、内灘町立西荒屋小学校、羽咋市立粟ノ保小学校、小松市立国府小学校、加賀市立河南小学校で講座を行い、のべ四七八名の児童、教員、保護者の方々にご参加いただきました。展示する作品は日本画、洋画、彫塑、浮世絵などあわせて十三点で、作品から音を想像してみるアートゲームや、一つの作品について意見を出し合いながら見る対話型鑑賞を通して、鑑賞を深めました。また学校からの要望に合わせて、六年生には浮世絵の解説、四年生には工芸見本を用いた伝統工芸の解説も行いました。



1月の行事予定

■土曜講座	13時30分～15時	美術館ホール	無料
16日(土)	工芸にみる吉祥紋	学芸員	奈良竜一
23日(土)	狩野派入門	学芸主任	中澤菜見子
30日(土)	仏像は語るI	副館長	谷口出
■映像ギャラリー	14時30分～15時30分	美術館ホール	無料
10日(日)	「続・美術のみかた 絵画からデザインへ」 「作家シリーズ 創作の原点 装飾の美 ガレ／ミュシャ」 「珠玉の仏教美術 仏教伝来と聖徳太子」 「奈良の名刹 飛鳥 飛鳥大仏と万葉の里」	24分 30分 45分 26分	
31日(日)			



ご参加にあたっての注意事項

- ① 来館時にサーモグラフィによる体温チェックを行います。体温が三十七度五分を超える方の参加はご遠慮ください。
- ② マスクの着用、手指消毒の徹底をお願いいたします。
- ③ 参加時は受付名簿に氏名と連絡先をご記載ください。
- ④ 密集を避けるため、前後両隣の席を空けての着席をお願いいたします。
- ⑤ ホール内では会話を極力ご遠慮ください。

重要文化財《色絵梅花図平水指》 いろえはいかすひらみずさし
 口径 23.4 × 底径 20.7 × 高 14.6(cm)
 江戸17世紀

野々村仁清 ののむら・にんせい
 生没年不詳



梅の花は、寒く暗い冬が終わり、暖かく明るい春の到来を告げるものとして、その香りとともに東洋では古くから愛でられてきました。中国の故事から「好文木」とも呼ばれ、学問の神・天神となつた菅原道真と梅との深い関わりや、清少納言が『枕草子』で「木の花は、濃きも薄きも紅梅。」と述べているのも、こうした伝統によるものでしょう。梅はさらに、闇を破る光として禅宗では悟りの象徴となっています。したがって、禅宗の影響のもとに展開した

茶の湯で用いることを前提とした本作にも、文学的背景とあわせて禅的な意味が込められていると考えられます。作者の仁清は、野々村清右衛門といい、丹波国野々村(現、京都府北桑田郡美山町)の出身といわれます。瀬戸、美濃、京都粟田口などで陶法を学び、一六四七年頃に御室・仁和寺門前に御室焼を始め、仁和寺の(仁)と清右衛門の(清)の字を合わせて(仁清)と称しました。仁清の特質は、やまと絵、漢画両面に精通した描写力と、漆芸や金工の表現技法を陶芸に翻案する応用力、そして土の特性を知りつくした造形力ということができます。これらの特質を駆使して、小堀遠州や金森宗和により、千利休の侘び茶を底流としつつも、綺麗さびの好みが主流となつていった時流を巧みに捉え、洗練されつつも汎用性の高い茶陶を数多く生み出しました。器体に仁清特有のやや黄味をおびた白釉を厚く掛け、蒔絵の加飾技法を意識して、金、銀、赤、黒、緑により老樹に鮮やかに咲く梅花を描いた本作にも、仁清の手腕が遺憾なく発揮されています。

次回の展覧会

令和3年2月13日(土)
 ~3月19日(金)
 会期中無休

前田育徳会 尊経閣文庫分館	第2展示室
前田家の 天神信仰	古九谷・再興九谷 名品選
第3・6展示室	第4展示室
優品選 【近現代絵画・彫刻】	生誕140年 熊谷守一展 2月11日(木祝)~3月14日(日)
第5展示室	1F企画展示室
はこ・箱・hako さまざまな素材とわざ 【近現代工芸】	

ご利用案内

コレクション展観覧料

一般 370円(290円)
 大学生 290円(230円)
 高校生以下 無料
 ※()内は団体料金
 1月7日は第1月曜日より
 コレクション展示室無料の日

1月の開館時間

午前9:30~午後6:00

カフェ営業時間

午前10:00~午後6:00 年中無休

1月の休館日は
 1日(金祝)~3日(日)

「石川県立美術館だより」に広告を掲載しませんか?

石川県立美術館友の会会員、石川県立美術館協力者、
 県内各行政機関及び文化施設、全国の美術館・博物館へ

郵送配布!! 3,000部発行

ターゲットを狙った
 知名度向上

県立美術館発行の
 信頼度の高い広報媒体

お問い合わせは ☎092-716-1401

株式会社ホープ 福岡県福岡市中央区薬院1-14-5MG薬院ビル7F
 東京証券取引所マザーズ上場 福岡証券取引所Q-Board上場 財務確保 株票

石川県立美術館だより
 第447号(毎月発行)
 2021年1月1日発行
 〒920-0963
 金沢市出羽町2番1号
 Tel:076(231)7580
 Fax:076(224)9550
 URL <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>

石川県立美術館は電源立地地域対策交付金を活用して運営しています。